《西洋史研究室の現在》

時代別演習と専任教員の講義

令和 6 年度　西洋史学演習 I（西洋古代史演習）担当：准教授　藤井　崇

今年度の古代史演習には、最大で 11 名の院生・学生が参加した。前期には、Clifford Ando, *Imperial Ideology and Provincial Loyalty in the Roman Empire*, Berkeley, 2000 を講読し、後期には、受講者による研究報告をおこなった。

2 世紀のローマは、面積おおよそ 500 万平方キロメートル、人口おおよそ 6,000 万人を誇る大帝国となった。シカゴ大学の Ando による本書は、この帝国が数百年にわたって存続し、多数の住民が帝国を「祖国（パトリア）」と認識するに至ったメカニズムについて、独自の視点から明らかにした名著である。学説史の大きな流れからいえば、ファーガス・ミラーによる皇帝と諸共同とのコミュニケーションについての研究を、宗教やイデオロギーの側面を重視しつつさらに進めた作品と位置づけることができるだろう。帝国の統合と存続の理由としては、強大な軍事力や広範な経済ネットワークなどさまざまな可能性が考えられるが、本書が強調するのは、情報伝達とそれに基づく帝国民の合意形成である。本年度に講読した前半部は、主として帝国中央と属州とのコミュニケーションのあり方に焦点を当てている。具体的には、各種文書の伝達形式、属州社会での文書の受容、皇帝への忠誠のモデルを提示した元老院の役割、皇帝の帝国内移動の意義、属州民によるローマ法・法廷の利用、aurum coronarium などの儀礼と帝国内の合意形成との関係、などが扱われている。Ando は多様な史料を自在に利用する一方、ハーバーマスなどの現代の思想家の理論も援用し、ダイナミックな議論を展開している。

後期の演習では、例年と同じく、受講生がそれぞれ自身の研究報告をおこなった。研究報告をおこなう者が予習のための英語論文を指定し、それを参加者全員で講読したうえで、研究報告・質疑応答をおこなった。参加者の研究報告の内容を、以下に列挙する。ヤン・アスマンの記憶研究の論評、ヘロデ朝におけるパリサイ派、ローマ帝政期エジプトの任意団体、古代地中海の海賊、プリニウス『博物誌』におけるインフラ、アリステイデスの『聖なる話』、アウグスティヌスの著作を利用した感覚史の試み、シドニウス・アポリナリスのゲルマン人観、ポスト・ローマ期のイベリア半島。博士論文の構想を紹介する回も設けた。さらに、中国、イギリス、アメリカ、ドイツからゲスト・スピーカーを迎えて、研究交流をおこなうことができた。

令和 6 年度　西洋史学演習 II／欧米歴史社会論演習IA（西洋中世史演習）
担当：教授　佐藤　公美（人間・環境学研究科）

前期のテキストは Christian D. Liddy, *Contesting the City: The Politics of Citizenship in English Towns, 1250-1530*, Oxford University Press, 2017 であった。近年人文諸科学において注目されるシチズンシップ研究であるが、本書はヨーロッパ中世史でシチズンシップを扱った代表的なモノグラフィーである。日本では中野忠「ヨーロッパ中・近世都市の市民と市民権―二つの近著から―」（『比較都市史研究』39 巻、2020 年、34－43 頁）での紹介でも知られている。過去 3 年に渡って、私は全学共通科目「西洋史」で中世都市史の授業を続けていた。中世史の勉強をしようという大学生に踏まえてもらうべき前提はそちらで話しているから、演習では最新の研究の視角と具体例を受講生と議論しようという考えであった。市民「権」と訳することができる「シチズンシップ」であるが、その意味は広く、本書の趣旨はイントロダクション冒頭のまことに簡潔にして要を得た一文がこれ以上なく明快に示している。「シチズンシップは、流動的で、争いの余地ある理念と実践のカテゴリーであり、常にそうだったのである」［Liddy 2017，1］。それは口頭での言語行為や、文字による記録や伝達行為や、身体を使って時間と空間にはたらきかけ標づける行為などによって絶えず挑戦を受け変容するものであり、そうした行為の動的プロセスそのものを含む「市民であること」とも言えそうだと私は思う。だからシチズンシップの歴史はアイデンティティ・ポリティクスの歴史であり、都市の政治文化史であり、紛争とコミュニケーションの歴史であり、身体史、空間史、時間史、景観史でもあり、これらの痕跡が刻み込まれるとともにそれ自体が時間、空間、社会、イメージの構築に働きかけるものとしての史料を扱う史料論でもある。これら最新の研究手法と概念を学ぶためにも一級のテキストであったと思う。前期は西洋史学を専攻する学生他にもイスラム史、英文学、映画研究等を志す参加者を得た。英文学専攻の学生からは、歴史学の専門英文書籍としてだけではなく英語そのものを丁寧に読む読み方を教えてもらいながら、参加者が一緒に解釈を考え直し発見的にテキストに向き合う時間を持つことができた。

後期は前半を史料論の学習、後半を各自の研究発表という形で行った。史料論は高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』（東京大学出版会、2005 年）を 2 部に分け、後期演習の前半を使って 2 年間で学習するというスタイルで近年は進めている。中世哲学とイスラム史を専攻する文学研究科の院生の参加を得て、各専門分野の知見を中世ヨーロッパの史料と比較しながら議論を重ね、大変興味深い学びを進めることが出来たように思う。学際性はしっかりした各自のディシプリンの修得を要する。前期も後期も、専門性を活かしてお互いが学び成長するとはこういうことか、という気づきを受講生からいただいたことに感謝したい。研究発表の部分については、2024 年度に人間・環境学研究科に着任した福元健之先生と合同で開催するという新しい試みを始めた。ゼミという日常的でアットホームな場で、厚い研究キャリアを持つ先輩たちも加わり、学生・院生が地域も時代も専門分野も越えて気軽に議論し合えるのは非常によい経験だと自分には思われたが、今後もこだわりなく、縛られず、

試行錯誤を重ねてみたいと思っている。福元先生と福元ゼミのみなさんにこの場を借りてお礼申し上げたい。

令和 6 年度　西洋史学演習 III（西洋近世史演習）担当：教授　小山　哲、講師　安平　弦司

本年度の近世史演習も、前年度同様、小山と安平が 2 人で担当した。新型コロナウイルス関連の規制が全面解除された中、1 年近くの留学に赴く学部生・院生が複数名いた。時差がある中でもオンラインで演習に参加する留学中の受講生もおり、京都と世界をつないで活発な議論が飛び交う賑やかな演習となった。意欲ある学生たちが留学を見送らざるを得ないような世界情勢にならないことを祈るばかりである。

前期の講読テキストとしては Benjamin J. Kaplan and Jaap Geraerts (eds.), *Early Modern Toleration: New Approaches*, London & New York: Routledge, 2024 を採用した。近年の近世ヨーロッパの宗教的寛容研究においては、伝統的な寛容 tolerance の思想史から、寛容 toleration 実践の社会史・文化史へと関心の転換が起こっている。本書は、近年の寛容社会史・文化史研究を牽引してきた Kaplan とその弟子 Geraerts が編んだ論集である。同論集が扱う地域は幅広く、ヨーロッパ諸地域のみならず、オスマン帝国や北米・東南アジアの植民地も含まれる。全 13 章は 5 つのテーマに区分けされている。パート I「他者を感じる」（第 1~3 章）、パート II「アイデンティティを主張する」（第 4~5 章）、パート III「境界線を越える」（第 6~8 章）、パート IV「相互作用し関係性を持つ」（第 9~10 章）、パート V「空間を共有する」（第 11~13 章）。それぞれのパートの冒頭には両編者が共著した史学史的なイントロダクションが付されており、テーマごとに史学史・理論・方法論の見取り図を得た上で個別の事例研究に臨むことができるよう工夫が凝らされている。

演習では、最初に全体のイントロダクション「近世の寛容」と各パートのイントロダクションを読んだ後、受講生各人の関心に照らして以下の章を取り上げて読み、議論した。アウクスブルクの和議体制下での都市内宗派共存を扱った第 1 章、低地地方南部のメヘレンにおける聖歌の問題を論じた第 2 章、スペインのコンベルソとモリスコのアイデンティティを分析した第 4 章、フランス宗教戦争の記憶を扱う第 5 章、神聖ローマ帝国へのオランダ改革派難民を論じた第 6 章、オスマン帝国における改宗と宗派混合婚を分析した第 8 章、大陸ヨーロッパとの交易で活躍したイングランドのカトリック商人に光を当てた第 9 章、蘭領モルッカ諸島における植民地主義を扱った第 10 章、神聖ローマ帝国における複数宗派による教会共同利用を分析する第 11 章、クラクフのユダヤ人・プロテスタント・カトリックによる聖なる空間を巡る争いを論じた第 12 章、北米イングランド植民地における宗派間の境界線を扱う第 13 章である。各章の議論は多岐に渡り、寛容の語に込められた含意も章ごとに異なっていた。全体のイントロダクションでは、「本来存在すべきではないものを耐えること」という近世的な意味での寛容が本書の主題だとされていたが、この方針が執筆者

全員に共有されていたようには思えない。また、地域別ではなくテーマ別にパートを割り振るという構成は魅力的ではあるが、例えば公私区分論のように複数のパート（I、III、V）に論点が拡散してしまうことでその全体像が見えづらくなるという弊害もあるように感じた。翻って、受講生は、感覚史、感情史、空間論、アイデンティティ論、移民・難民、記憶の歴史、物質文化論、グローバル・ヒストリーといった多様な主題を扱う際の切り口の一つとして宗教的寛容が一定の役割を果たす、ということにも気付いたであろう。

後期は、例年と同様に、受講生が自らの関心に即した研究発表を行った。領邦都市コンスタンツの再カトリック化と宗派共存、ジェームズ・マディソンの市民観、地中海における捕虜交換、ポーランドとスウェーデンを跨いだ人的交流と外交活動、動乱時代ロシアにおけるポーランド観、傭兵についての新しい軍事史、ボヘミア王国からの宗派移民、近世イングランド史におけるメアリ 1 世時代の位置づけ、ポーランドの啓蒙主義、神聖ローマ帝国の永久帝国議会、革命期フランスにおける「外国人」問題、フランス革命後の公認宗教体制におけるカトリック信仰の変容、社会主義体制下のハンガリーのユダヤ問題といったように、扱う地域も、主題も、そして時代までも幅広い、ユニークな発表ばかりであった。多様な関心を持ち、近世史という緩やかな共通項を持つ受講生たちが、演習での議論を通じて互いに切磋琢磨し学び合っていくことをこれからも期待している。

令和６年度　西洋史学特殊講義　担当：教授　小山　哲

本年度の前期は、「ポーランド史の窓から――ヨーロッパ史のもうひとつの視角」というタイトルのもとに特殊講義を行なった。シラバスで予告した講義の趣旨は、次のようなものである。「ポーランドから見ると、ヨーロッパ史はどのように見えるのだろうか。ポーランドの人びとは、ヨーロッパ世界のなかに、どのように自らを位置づけてきたのだろうか。そのさいに「東」と「西」の区分とその境界には、どのような意味が与えられてきたのだろうか。東に隣接するウクライナとの関係にも論及しながら、中世から近現代までの幅のなかで、ポーランド史におけるヨーロッパ認識の変遷について考察する。」このシラバスを書いた時点で私の念頭にあったのは、ポーランドのナショナル・ヒストリーの時空間の作られ方を、広域的な地域史としてのヨーロッパ史の次元と関連づけながら、あらためて考え直してみたい、という問題意識であった。じっさいの講義では、ポーランド史を「ポーランド民族の歴史」としてとらえる歴史像の成り立ちを批判的に検証したのちに、それに代わる視点として「多様な社会集団が接触・交差する地域としてのポーランドの歴史」を設定し、中世から近現代まで、ポーランド地域からみたヨーロッパ像と、ヨーロッパにおけるポーランド地域のイメージの双方の変遷を概観した。対象とした時代が長期にわたるため、題材のとりあげ方は、選択的かつ断片的なものにならざるを得ない。とはいえ、ポーランド分割以降の時代については、いささか駆け足に過ぎたかもしれない。ウクライナとの関係については、第 2 回（4 月 17 日）の授業で、人文科学研究所の藤原辰史さんが担当する ILAS セミナーと合同

で、パレスチナ問題との歴史的な関連性にも触れながら話をした。

後期は、「ヤン・フリゾストム・パセクの世界――17 世紀のポーランド貴族の回想録から」と題して、時代と対象をより限定した講義を試みた。ポーランドの 17 世紀は「日記・回想録の時代」とも呼ばれ、出版を想定しない手書きの記録が多数残されている。書き手の多くは貴族身分（シュラフタ）の男性であった。そのようなテキスト群のなかから、ヤン・フリゾストム・パセク Jan Chryzostom Pasek (c.1636～1701) の回想録をとりあげ、その内容を紹介しながら、17 世紀のポーランド貴族が自らの生きる世界をどのように認識し記述したか、その歴史的特質を探ることが講義の目標であった。最初に、これまでのシュラフタ文化論の研究史を整理し、多くの日記や回想録が書かれた 17 世紀の文化史的な背景を概観した。次いで、19 世紀前半にテキストが「発見」されてから今日にいたるまでのパセクの回想録の出版・研究の歴史を、複数の校訂版の異同とそれぞれの特徴にも触れながら、紹介した。そのうえで、回想録の一部を翻訳し注釈をつけたテキストを提示しながら、記述された出来事の歴史的な文脈、書き手の意図、表現上の特徴などについて解説を加えた。私はこの回想録については論文などを書いたことがなく、翻訳・解説も手探り状態で進めることになった。長い回想録の一部分しかとりあげることができず、また、解釈に迷いの残る箇所については、答えが出ない理由をそのまま語ったので、受講生にとってわかりにくいところがあったかもしれない。パセクの回想録は、近世のポーランド語で書かれた自分語りの作品としては興味深いテキストなので、翻訳と注釈の作業を今後も続けていきたいと考えている。

令和 6 年度　西洋史学特殊講義　担当：講師　安平　弦司

前期は「近世オランダにおける宗派共存とカトリックのサバイバル」と題して講義した。宗教改革後のヨーロッパにおいて、宗派共存は大きな課題であった。宗教的多様性は公的秩序や政治=社会的安定への脅威として認識されていたからである。近世のオランダ共和国は、改革派を唯一の公的教会としつつも、宗派共存が機能した社会だとされる。他方、オランダのカトリックは潜在的な国家反逆者の烙印を押され、公的領域における多くの権利を剥奪されていた。本講義では、近世オランダの宗派共存を、従来の研究で主に用いられてきた改革派の統治戦略の視角のみならず、カトリックの生存戦術の視角からも捉えなおそうと試みた。改革派の統治戦略として迫害と寛容を、カトリックの生存戦術として空間実践と自己表象言説を取り上げて論じた。本講義はその開講中に出版された講義担当者の単著 *Catholic Survival in the Dutch Republic: Agency in Coexistence and the Public Sphere in Utrecht, 1620–1672*, Amsterdam: Amsterdam University Press, 2024 を下敷きにしていたが、受講生の反応や質問から新たに学ぶことも多かった。

後期は「近世オランダにおけるカトリックとジャンセニスム論争 2」という題目で講義した。昨年度後期に引き続き、近世カトリック教会で異端視されたジャンセニスムを特にオランダ史・低地地方史の文脈の中で理解しようとした。まず、ジャンセニスム論争に踏み込む

前段階として、特に教会論と救済論・道徳論について、古代から中世を経て近世にいたるまでのキリスト教史の論点を整理した。次に、近世オランダに舞台を移して、16 世紀にはカトリックとプロテスタントの間で、17 世紀前半には改革派内部（レモンストラント論争）で、さらに 17 世紀半ば以降はカトリック内部（ジャンセニスム論争）で教会論と救済論・道徳論を巡る論争が断続的に続いたことを確認し、ジャンセニスム問題を長いタイムスパンの中で理解しようと試みた。最後に、近世オランダのジャンセニスム論争の教会史と政治文化史について、より専門的に議論した。来年度以降も、ジャンセニスム問題をより多角的に論じることできるように授業準備を進めたい。

令和６年度　西洋史学演習 IV（西洋近代史演習）担当：教授　金澤　周作

前期の精読用テキストは Beatrice de Graaf, Ido de Haan, and Brian Vick (eds.), *Securing Europe after Napoleon: 1815 and the New European Security Culture* (Cambridge University Press, 2019)である。刊行時、前二者はオランダのユトレヒト大学、三人目の編者は米国エモリー大学の教授で、皆、近現代ヨーロッパ国際関係史の分野で多くの業績がある。昨年度の演習で読んだ Glenda Sluga, *The Invention of International Order: Remaking Europe After Napoleon* (Princeton University Press, 2021)がきわめて斬新な内容であったため、著者 Sluga が同書出版の前に一寄稿者として関わりナポレオン戦争末期からの新しいヨーロッパ像を吸収したはずの論文集を選んだ。

この論文集は、「ウィーン体制がいくつもの点でたんなる勢力均衡の確立をはるかに超えるものであり、一連のヨーロッパの制度、実践、担い手、さらには理念、原理、認識が、さまざまな仕方でヨーロッパ安全保障文化のなかに領土問題の解決を組み込んだこと」に焦点を当てることを目的としている。キーワードは 1815 年から 1914 年までの新しい「ヨーロッパ安全保障文化」という耳慣れない概念であるが、次のように定義される。互いに共有されつつ度々対立する、「重要な利害と脅威についての諸認識」と「さまざまな担い手がそうした理念や期待に基づいて行動する時の機構や実践」の総和。やや分かりにくいが、約四半世紀に及ぶフランス革命・ナポレオン戦争の混乱と惨禍の中から立ち上がるヨーロッパの、あるべき安定についての認識（理念・期待）と、それを実現するための具体的な制度的な仕組みと行動の全体という意味である。復古や勢力均衡という後ろ向きで抑圧的な、そして静態的で非制度的なイメージで語られることの多かったウィーン体制――第一次世界大戦後の国際連盟による新しい国際秩序と好対照をなすと目されてきた――の歴史的な意味を、大胆に再考するための視座を提供している。ナポレオン戦争末期から構想され、練り上げられ、実装された、先駆的な各種の多国間協調の理念と仕組みの諸事例は、受講生を大いに啓発する内容であった。

序論を除き 15 章から成り、理念や認識が、近世から現在に至る長期的な歴史の推移を踏まえ、詳しく扱われている一方で、やはり具体的な制度や仕組みの事例研究に、興味深いも

のが多かった印象である。七か国代表で構成され自由航行を監督したライン河航行中央委員会、4 大国の神聖同盟、ロンドンで始まった定期開催の大使級会議、ナポレオン戦争後のフランス占領や賠償金問題を担った同盟国大使級評議会、最近ポジティヴな再評価がなされるようになってきている（トランスナショナルな警察機能も帯びた）ドイツ連邦、革命をもくろむ国際陰謀の脅威に対抗するべく形成された各国の警察機構、ヨーロッパを脅かす不安定なイタリア半島におけるオーストリア支配による安全保障機能、ながらく私掠やキリスト教徒の虜囚化によってヨーロッパを悩ませてきたマグリブのバーバリ諸国家に対するヨーロッパ諸国の一致した対応。他にも、バルカン半島の政治情勢とヨーロッパ安全保障文化の関係を論じるものもあれば、Sluga 自身は後の単著につながるような女性やビジネスマンなど多様なアクターの協同による新秩序形成を論じていた。

長い 19 世紀のヨーロッパ史は、たとえば近世ヨーロッパ史に比べると、全体を把捉するキーワード——複合国家、宗教改革・宗派対立など——が乏しく、個々の研究者もヨーロッパというよりも個々の国の内部に関心を絞る傾向が強いように思われる。この点、ウィーン体制は、「西洋近代史」を学ぶ上で格好の素材であるということがよく理解できた。ヨーロッパ諸地域にまたがる多言語の史料に立脚する実証論文で構成された、すぐれた研究成果である。実際、それぞれに「フィールド」を持つ受講生たちによる議論は多岐にわたり、発見の多いものであった。

前期の最初には、この年に提出されたイタリア近代史の卒業論文を、卒業し大学を離れた本人の許可を得て、皆で読んだ。日本語や英語の雑誌論文とは違う身近さがあるがゆえに、学部生にとっては適切な目標を設定できたであろうし、大学院生以上の受講生にとっても、自身の研究成果の書き方についてあらためて反省することができたのではないかと思う。後期のはじめには、夏休みに読んだ欧文の学術書や論文の紹介をしてもらった。その後はいつも通り、受講生の個別報告の機会を設けた。今年度もさまざまな出自の受講生が集い、相互に刺激し合える場になったと思う。